

■■最強の投資手法「スーパーボリンジャー」によるシンプルトレード■■

ドルストレート通貨ペア(ドル円、ユーロドル、豪ドルドル、ポンドドル)、クロス円通貨ペア(ユーロ円、豪ドル円、ポンド円)に関して、週足、日足、4時間足、1時間足分析を掲載します。分析は、全て、2月6日のNY市場終値(先週末終値)時点での判断です。

<<<主要7通貨相場週足、日足、4時間足、1時間足分析>>>

「週足」はポジショントレードの大局観把握、

「日足」はスイングトレードの大局観把握、

「4時間足」はゆったりデイトレードの大局観把握、

「1時間足」はデイトレードの大局観把握に特に有効です。

尚、特に、1時間足は、刻々と変化するため、その都度の判断が必要です。

また、売買判断は、トレードスタイル別の大局観より下位の時間軸チャートにて判断することをお勧めします。

例えば、ポジショントレードであれば、主に日足での売買判断、

スイングトレードであれば、主に4時間足での売買判断、

ゆったりデイトレードであれば、主に1時間足での売買判断、

デイトレードであれば、主に5分足での売買判断となります。

■■ドル円

◆週足

調整反落局面。

本格上昇トレンド局面の後、終値が+1σラインを下回って以降、調整反落局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は売りを優先させたい局面だが、センターラインが下値サポートとなって反騰のシナリオもあり、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな上昇トレンド局面に入る可能性が高まる。

一方、終値がセンターラインを下回ると、本格的な調整反落局面に入る。

尚、今後、終値が+2σラインを上回るまでは、+1σラインから+2σラインのゾーンは、一旦は戻り売りチャンスと判断する。

また、遅行スパンが陰転しないかぎり、センターラインから -2σ ラインにかけての価格帯は、一旦は押し目買いゾーンとなる。

◆日足

本格的な調整反騰局面。

調整反騰局面の中にあつて、終値がセンターラインを上回つて以降、 $+2\sigma$ ラインを目指す本格的な調整反騰局面入りしていると判断。

トレード戦略としては、目先、買い戦略が有効な場面ではあるが、今後、遅行スパンが陽転しないかぎり、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインのゾーンは、一旦は戻り売りチャンスとも読む。

尚、今後、遅行スパンが陽転し、終値が $+2\sigma$ ラインを上回り、バンド幅が拡大傾向に転じる場合は、本格上昇トレンド局面入りする可能性が高まる点には念のため注意しておきたい。

◆4時間足

緩やかな上昇トレンド局面。

終値とセンターラインとの位置関係を注視したい場面。

すなわち、終値がセンターラインを上回るかぎり緩やかな上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、緩やかな上昇トレンドの特徴がセンターラインと $+2\sigma$ ラインの間を往来しながらゆっくりと上昇するところから、センターラインに接近する場面は、一旦は押し目買い戦略が有効となり、 $+2\sigma$ ライン近辺では戻り売り戦略が有効となりやすい。一方、終値がセンターラインを下回ると、本格的な調整反落局面入りする可能性が高まるため、買いポジションは一旦撤退となる。

◆1時間足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯

では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $+2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
- 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $+2\sigma$ ラインをブレイクすること、等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

■ ■ ユーロドル

◆ 週足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $+2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
- 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $+2\sigma$ ラインをブレイクすること、等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆ 日足

調整反落局面。

本格上昇トレンド局面の後、終値が $+1\sigma$ ラインを下回って以降、調整反落局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は売りを優先させたい局面。

そして、センターラインは最初の押しの目途となるが、終値がセンターラインを下回ると、 -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面に入る。

一方、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな上昇トレンド局面に入る可能性が高まる。

尚、遅行スパンが陰転しないかぎり、センターラインから -2σ ラインにかけての価格帯は、一旦は押し目買いゾーンと読む。

また、終値が $+2\sigma$ ラインを上回るまでは、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインのゾーンは一旦は戻り売りチャンスと判断する。

◆4 時間足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
- 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、等々。特に、(2)の条件がクリアされることが望ましい。

◆1 時間足

調整反落局面。

本格上昇トレンド局面の後、終値が $+1\sigma$ ラインを下回ったことで、調整反落局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は売りを優先させたい局面。

そして、センターラインは最初の押しの目途となるが、終値がセンターラインを

下回ると、 -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面に入る。

一方、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな上昇トレンド局面に入る可能性が高まる。

尚、遅行スパンが陰転しないかぎり、センターラインから -2σ ラインにかけての価格帯は、一旦は押し目買いゾーンと読む。

また、終値が $+2\sigma$ ラインを上回るまでは、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインのゾーンは一旦は戻り売りチャンスと判断する。

■ ■ 豪ドル/ドル

◆ 週足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が $+2\sigma$ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

◆ 日足

緩やかな上昇トレンド局面と調整反落局面が併存中。

終値が $+1\sigma$ ラインを下回って以降、調整反落局面入りしたが、最初の押しの目途であるセンターライン近辺まで下落した後に反騰している。

今後、終値がセンターラインをキープするかぎり、緩やかな上昇トレンド局面と読む一方で、終値が $+2\sigma$ ラインを超えないかぎり、調整反落局面継続のシナリオも残る。

トレード戦略としては、センターラインにかけては、一旦は押し目買いを優先させたい一方で、終値がセンターラインをブレイクすると、本格的な調整反落局面に入ることから、

一転して売り戦略が有効となる。

また、終値が+2 σ ラインをブレイクするまでは、戻り売り戦略が有効である一方で、終値が同ラインを上回ると、あらためて本格上昇トレンド局面入りするため、買い戦略が有効となる。

◆4 時間足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、+1 σ ラインから+2 σ ラインにかけての価格帯では戻り売り、-1 σ ラインから-2 σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が+-2 σ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が+2 σ ラインの上方にて引ける、もしくは、-2 σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
- 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、+-2 σ ラインをブレイクすること、等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆1 時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が+2 σ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と+1 σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が+1 σ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が+1 σ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

■■ポンドドル

◆週足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
 - 2) 終値が $+2\sigma$ ラインの上方にて引ける、もしくは、 -2σ ラインの下方にて引ける、
 - 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、 $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆日足

本格的な調整反落局面。

調整反落局面の中にあつて、終値がセンターラインを下回って以降、 -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りしていると判断。

トレード戦略としては、目先、売り戦略が有効な場面ではあるが、今後、遅行スパンが陰転しないかぎり、 -1σ ラインから -2σ ラインのゾーンは、一旦は押し目買いチャンスとも読む。

尚、今後、遅行スパンが陰転し、終値が -2σ ラインを下回り、バンド幅が拡大傾向に転じる場合は、本格下落トレンド局面入りする可能性が高まる点には念のため注意しておきたい。

◆4時間足

調整反騰局面。

本格下落トレンド局面の後、終値が -1σ ラインを上回って以降、調整反騰局面入りしている。

トレード戦略としては、短期的に一旦は買いを優先させたい局面。

そして、センターラインは最初の戻りの目途となるが、終値がセンターラインを上回ると、 $+2\sigma$ ラインを目指す本格的な調整反騰局面に入る。

一方、今後、終値がセンターラインをブレイクしないと、緩やかな下落トレンド局面に入る可能性が高まる。

尚、遅行スパンが陽転しないかぎり、センターラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯は、一旦は戻り売りゾーンと読む。

また、終値が -2σ ラインを下回るまでは、 -1σ ラインから -2σ ラインのゾーンは一旦は押し目買いチャンスと判断する。

◆1時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が $+2\sigma$ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

■■ユーロ円

◆週足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が $+2\sigma$ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と+1σラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が+1σラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が+1σラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

◆日足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、+1σラインから+2σラインにかけての価格帯では戻り売り、-1σラインから-2σラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が+-2σラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 遅行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
 - 2) 終値が+2σラインの上方にて引ける、もしくは、-2σラインの下方にて引ける、
 - 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
 - 4) 遅行スパンがローソク足のみならず、+-2σラインをブレイクすること、
- 等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

◆4時間足

緩やかな上昇トレンド局面。

終値とセンターラインとの位置関係を注視したい場面。

すなわち、終値がセンターラインを上回るかぎり緩やかな上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると-2σラインを目指す本格的な調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、緩やかな上昇トレンドの特徴がセンターラインと+2σラインの間を往来しながらゆっくりと上昇するところから、センターラインに接近する場面は、一旦は押し目買い戦略が有効となり、+2σライン近辺では戻り売り戦略が有効となりやすい。一方、終値がセンターラインを下回ると、本格的な調整反落局面入りする可能性が高まる

ため、買いポジションは一旦撤退となる。

◆1時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が $+2\sigma$ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

■ ■ 豪ドル円

◆週足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が $+2\sigma$ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

◆日足

緩やかな上昇トレンド局面。

終値とセンターラインとの位置関係を注視したい場面。

すなわち、終値がセンターラインを上回るかぎり緩やかな上昇トレンド局面継続となる

一方、終値が同ラインを下回ると -2σ ラインを目指す本格的な調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、緩やかな上昇トレンドの特徴がセンターラインと $+2\sigma$ ラインの間を往来しながらゆっくりと上昇するところから、センターラインに接近する場面は、一旦は押し目買い戦略が有効となり、 $+2\sigma$ ライン近辺では戻り売り戦略が有効となりやすい。一方、終値がセンターラインを下回ると、本格的な調整反落局面入りする可能性が高まる。そのため、終値がセンターラインを下回ると、買いポジションは一旦撤退となる。

◆4 時間足

本格上昇トレンド局面入りの兆候。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転してきている、(2)現在値が $+2\sigma$ を上回りつつある、(3)バンド幅が拡大傾向となってきたことなど。

目先、終値が $+2\sigma$ を上回るかどうかと、その後、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする可能性が高まる。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

◆1 時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)終値が $+1\sigma$ を上回り続けている、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

■■ポンド円

◆週足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)遅行スパンが陽転している、(2)初動で終値が $+2\sigma$ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と $+1\sigma$ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が $+1\sigma$ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が $+1\sigma$ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

◆日足

基調としての上昇トレンド局面。

遅行スパンが陽転しているかぎりにおいて、基調としての上昇トレンドと判断する。

トレード戦略としては、遅行スパンがローソク足に接近、接触するタイミングは押し目買い戦略が有効。また、終値が -2σ を下回る場合は、一旦撤退となる。

尚、基調としての上昇トレンド局面の特徴は、上下に比較的大きな値幅を伴って往来しながらゆっくりと上昇していくところ。そのため、カウンタートレードも効果的となる。すなわち、上昇バイアスを伴ったレンジ局面の場合と似たトレード戦略が効果的となる。

◆4時間足

レンジ局面。

判断根拠は、遅行スパンがローソク足に絡んでいることや、バンド幅が収束傾向であること。目先、カウンタートレードを行うか、相場の放れを待ってトレンドに乗りたい場面と判断する。カウンタートレードのトレード戦略としては、 $+1\sigma$ ラインから $+2\sigma$ ラインにかけての価格帯では戻り売り、 -1σ ラインから -2σ ラインにかけての価格帯では押し目買いが推奨される。そして、終値が $\pm 2\sigma$ ラインをブレイクするとロスカットとなり、その時点で、相場が放れる、つまり、トレンドが発生する可能性が高まる。

尚、トレンド発生の際の「相場の放れ」の条件は、

- 1) 運行スパンがローソク足から上放れる(陽転する)、もしくは、下放れる(陰転する)、
- 2) 終値が+2 σ ラインの上方にて引ける、もしくは、-2 σ ラインの下方にて引ける、
- 3) バンド幅が拡大傾向に転じる(「エクспанション」と言う)、
- 4) 運行スパンがローソク足のみならず、+-2 σ ラインをブレイクすること、
等々。特に、(2)の条件がクリアーされることが望ましい。

また、買いシグナル、及び、赤色スパン陽転の逆行パターンの売りサイン点灯中だが、最終ターゲットである-2 σ ラインには既に一旦到達済み

◆1 時間足

本格上昇トレンド局面。

判断根拠は、(1)運行スパンが陽転している、(2)初動で終値が+2 σ を上回ったこと、(3)バンド幅が拡大傾向となっていることなど。

目先、終値と+1 σ ラインとの位置関係を注視したい局面。

すなわち、終値が+1 σ ラインを上回るかぎり本格上昇トレンド局面継続となる一方、終値が同ラインを下回ると調整反落局面入りする。

トレード戦略としては、終値が+1 σ ラインを上回り続けるかぎり、買いポジションキープする一方で、終値が同ラインを下回ると、一旦手仕舞いを推奨。

そして、調整反落局面入りを確認後は、短期的に売り戦略も有効な場面となる。

以上です。